

『恋に住み着く、一輪の花のようだった』

ashikure_U1

「貴女も人探しをしているの？」

「え？」

私の目の前に現われた少年は、唐突に言った。私の目を覗き込み、まるでその奥にある脳髓まで舐め回されているかのようだ。不思議な感覚である。

「ええ、そうよ。よくわかったわね」

私は特に不快感を表に出さずにそう答えた。知らない人間に声をかけられることは慣れているし、別段、それを迷惑だと感じることもない。ただ、この少年は、これまで私に声をかけた人間とは違っているように思えた。

「貴女から不幸が出ていたからね」

「不幸？」

「そう。僕も色々なタイプの不幸を見てきたけど、貴女のそれは、会いたい人に会えないものだ。たとえばかつて好きだった人、とかね」

「へえ。お兄ちゃん、すごいんだね」

「まあね」

少年は得意げな顔をして言った。心を読まれているかは知らないが、こちらの状況を当ててしまったことには素直に驚いた。もしかしたら私の知らない世界がまだまだ存在するのかもしれない。

「ついてくるかい？」

「え？」

「僕が貴女の探し人の所まで案内してあげるよ」

「でもそんな……」

「かまわないさ。だって僕は、【探し人】だからね」

「探し人？」

「そうさ。必殺仕事人みたいでカッコイイだろ？」

少年はそう呟くと、よほど自分の言ったことが面白かったのか、ひとりでゲラゲラと笑い出した。笑うと目が糸のように細くなり、その姿は年相応であるかのようで、少しだけ私を安心させた。

「ふふ。面白いわね」

「でしょ？」

「わかったわ。お兄ちゃんについて行くことにする」
こうして私は、少年の手引きを受けることとなった。

家出をした。こんなことは人生で初めてのことである。これまで、至極真つ当にまさに真面目という漢字が擬人化したかのような生活を送ってきた私からすれば、まさにこれは天変地異でも起こったかのような事態だった。厳密に言えば、天変地異が起こったかのように感じたのは私の家族親戚友人知人であつて、彼らからすれば、私がその天変地異の震源地であるということなのだけれども。しかしながら、現在の私の心境は意外と落ち着いていて、天変地異といつても、中心は静かであるという意味でこれは台風なのだ、と思つてしまうほどだ。いや、こんなことを思っているのは私だけか。まあとにかく、この家出は私からしてみれば人生の一大決心。一念発起。一発逆転。な機会のわけだけれども、今現在私がどこにいるのかがまったくわからない。どうしよう。

佐渡を出て新潟までフェリーで来たことは間違いなかった。新潟特有の低い山々が空と同じ藍色をした水平線の向こうに見え、カモメだつて雰囲気を作つて場を盛り上げようと必死に飛んでいたように記憶している。カップルや家族連れを尻目に、私はトラツクの運ちゃんたちと食堂で飲み物を飲んでいたので。そうここまでは合つていたはずだ。最初の予定通り計画

通り至極同然大正解ということか。フェリーを降りてから新幹線に乗ったことも、私の選んだ交通手段としては正しい選択であったはずである。初めて乗る新幹線は私が思っていた以上に静かで、窓から流れる景色はまるでビデオゲームのようであったと記憶している。なんだか体がフワフワしてしまって、体だけが心を置いてきぼりにして進んでいるような、そんな感覚があった。——そうだ、思い出した！ 私は自分の意志で新幹線を下車したのだ。なにぶん田舎者なもので、沢山の人が降りる場所こそが上野であると勘違いをしてしまっていたらしい。いやはや、恥ずかしい限りである。

ふと上を見上げれば看板がある。

——ここは熊谷だった。

聞いたことのない名前の街だった。それは、私に地理的な知識がないだけなのか、はたまたこの地が世間的にまったくといって無名な土地なのかはわからないが、とにかく、これまでの私の人生において、関わりが皆無であるという事実は確かであった。つまり、この場において私は赤子も同然で、どうすることもできない状態であるということだ。このまま路頭に迷ってこの世とおさらばしてしまう可能性だってある。こんなところで未練たらたらそのまま死んでし

まったら死んでも死にきれないというものだ。私は何とかして、己の脳みそをフル回転させ、解決策を探し出した。

——困ったら人に聞け。

これこそが人生を楽に円滑に進めるための秘訣だ。私はこれまでこの方法を使いヘビースモーカーが一日に消費する量のタバコの本数ほどの厄介ごとを凌いできた。この数が多いのか少ないのかは、私には判断しかねるが、とにかく、私は己の処世術を信じることにした。

人に聞く。

と、ここまで決まっていたはいいが、はたして誰に聞けばよいのかが問題である。なにせここは人が多すぎる。やたらといる。おそらく、今日は祭なのであろう。でなければ、この人数は説明が出来ない。なんせ、駅のホームにはそれぞれの乗車口に十人ほどが並んでいるし、エスカレーターに乗る人の列だって、まったく絶えない。そして何よりも、駅のそば屋があんなにも満席なことだ。こんな光景は、生まれて初めてだった。

気が付けば、この場所に立ち尽くして既に二十分の時が流れていた。その間に何人の人が私の前を通り過ぎたであろうか。その数は定かではないが、私の村の人口くらいはいるに違いない。私は脳みそに侵入してくるあまりの情報の多さにパニックを起こしまいそうになる。それも当然だ。私は、こんなにも多くの人間の渦に身を沈めたことなどない。全員が同じ顔に見える、個人が識別できない状態である。まるで、犬や猫などの動物を見ているようだ。もう誰に話し

かければよいのかまったく判断できない状態に、私はなってしまった。
ああ、どうしよう。どうしよう。

「貴女も人を探しているの？」

「え？」

私の目の前に現われた少年は、唐突に言った。